

明代初期の八股文について (1)

The Eight-legged Essay in the early Ming Dynasty (1)

滝 野 邦 雄
Takino, Kunio

ABSTRACT

This research paper investigates the eight-legged essays of the early Ming dynasty. Findings suggest that — although the form of the eight-legged essay had already achieved completion in the early-Ming — when viewed from the perspective of intellectual history, it was not until the mid-Ming period that these essays significantly built upon aspects of Zhu Xi’s commentaries, such as his *Sishu jizhu*. In short, by the mid-Ming period, these essays were used to embody the fundamental ideal of “speaking on behalf of the sages and the worthies”, which entailed writing in the spirit of wishing to become a sage or worthy.

はじめに

明代の八股文の変遷について、清の方苞（字は靈臯，晩年に望溪と号す。安徽桐城の人。康熙七年〔一六六八〕～乾隆十四年〔一七四九〕）は乾隆四年（一七三九）四月初三日に提出された「欽定四書文選 凡例」で、次のように言う。

明人の制義，體 凡そ屢しば變ず。洪〔武〕（一三六八年～一三九八年）・永〔樂〕（一四〇三年～一四二四年）より〔成〕化（一四六五年～一四八七年）・〔弘〕治（一四八八年～一五〇五年）に至る百餘年の中，皆な傳註を恪遵（謹んで遵守する）し，語氣を體會し，^{きまり}繩墨を謹守し，尺寸も踰えず。正〔德〕（一五〇六年～一五二一年）・嘉〔靖〕（一五二二年～一五六六年）の作者に至りて，始めて能く古文を以て時文と爲し，經史を融液（融かして

一体にする) し、題の義蘊(精密で奥深い意味)をして、隱顯(『禮記』表記にもとづく:見えかくれさせる)曲暢(委細に展開する)せしむ。明文の極盛と爲す。隆[慶](一五六七年~一五七二年)・萬[歷](一五七三年~一六二〇年)の間、機法①を兼講し、務めて靈變(変化が迅速なこと)を爲す。巧密(技巧) 加わること有りと雖も、氣體(勢いと品格) 茶然(衰微する)たり。[天] 啓(一六二一年~一六二七年)・[崇] 禎(一六二八年~一六四四年)の諸家に至れば、則ち「思いを窮め精を畢くし」(韓愈「潮州刺史謝上表」)、務めて奇特(特別)と爲し、載籍(典籍)を包絡(包括)し、物情(世情)を刻雕(刻み込み)し、凡そ胸中の言わんと欲する所の者は、皆な題に借りて之を發す。其の善に就く者は、興す可く觀る可く、光氣(氣風) 自ずから^{ほろぼ}泯す可からず。凡そ此の數種は、各々長ずる所有り、亦た各々其の弊有り……(『進四書文選表』『欽定四書文』凡例・一葉)。

①機:武之望(字は叔卿,号は陽紆山人。陝西臨潼の人。?~一六二九年。萬曆十七年[一五八九]己丑科三甲百三十八名の進士)の『舉業卮言』(萬曆二十七年[一五九九]自序)に「文字の妙處は、全く機に在り。文の機在るは、猶お車の軸有る・戸の樞有るがごとし。車に軸無ければ、則ち轉旋する能わず、戸に樞無ければ、則ち開闔(開閉)する能わず、文に機無ければ、則ち運動する能わず。故に行文の法 操縱有り、闔闔有り、抑揚有り、起伏有り、頓挫・錯綜有り、轉折・呼應・變化の百端⁽¹⁾有り。窮詰(追求)する可からず。而れども其の要は一に之を機に本づく。機 熟せざれば、則ち文 得て工なる可からず。是の機なるや、氣調の中を摩盪(擦れあつて推し動く)し、無を以て有を動かす者なり。詞格の内を幹旋(運動)し、虚を以て實を運ぶ者なり。之を矢を發する者の括を以てし、斤を運^{めぐら}ず者の巧なるを以てするに譬うるに、心 得て會す可く、口 得て言う可からず、己 得て能くす可く、人 得て受く可からざるなり。是れ善く學びし者の言意の外に自得するに在るのみ」(『舉業卮言』

卷之首・三十一葉・「機」条)。

ㄟ(1) 開闔・抑揚・頓挫・轉折について、『讀書作文譜』や『斯文規範』は次のように説明している。

開闔：「開闔」となっているが、『讀書作文譜』に「〔開闔〕唐彪 曰く、人皆な開闔を以て文の要法と爲す。而れども最も知り難き者は開闔なるを知らざるなり。諸家の言う所多く未だ明らかに悉くさず。今、反覆細思し、乃ち其の理を得。蓋し開闔なる者は、乃ち諸法の中に對待（相い対する）するに於いて抑揚の致すを兼ね、或いは反正の致すを兼ねる者、是れなり。賓主・擒縱・虛實・淺深の諸法の如きは、皆な對待する者なり。對待する有りて抑揚・反正の致す無ければ、則ち賓主は自ずから賓主なり、擒縱は自ずから擒縱なり、虛實は自ずから虚實なり。開闔と云う可からず。惟れ對待の中に兼ねて抑揚・反正の致す有るは、譬えば水の風に逆らう、風の風に逆らうが如く、一往一來し、激して文を成し、波瀾出るは、乃ち眞の開闔なり。惜しむらくは、其の理の久しく晦きを。 時藝（八股文）に就きて論ずれば、本股自ら開闔を爲す者有り。二股共に開闔を爲す者有り。四股共に開闔を爲す者有り。通篇 大開大闔する者有り。其の法を得る者は、文多く錯綜變化し、縦横離合の致す有り。故に開闔は時藝（八股文）の要法と爲すなり」（『讀書作文譜』卷之七・一葉～二葉・「開闔」条）。

抑揚：『讀書作文譜』に「唐彪 曰く、凡そ文 發揚せんと欲すれば、先ず數語を以て束抑し、其の氣をして收斂し、筆情 屈曲せしむ、故に之を抑と謂う。抑の後、隨いて數語を以て振發（展開）するを、乃ち之を揚と謂う。文章をして氣有り・勢い有りて、光焰 人に逼らしむるなり。此の法 文中に之を用いること極めて多く、最も緊要（重要）と爲す。太史公の諸々の贊は、乃ち抑揚の一端なるも、全體に非ざるなり。世人 知らず、竟に以て其の法と爲し、止だ之を人物を評論するのみに用いる可きと爲すは、何ぞ其れ此の法を小視するや。其の先に揚げ後に抑えるは、此れに反して觀るなり」（『讀書作文譜』卷之七・八葉～九葉）。

頓挫：『斯文規範』に「唐翼修 曰く、「文章に一氣の直行の理無し。一氣の直行すれば則ち但だ飛動（動き出そうとする勢い）を致す無きのみならず、且つ生發し難し。故に必ず一二の語を用いて之を頓し、以て起勢を作る」と（『讀書作文譜』卷之七・九葉・「頓挫」条）。頓とは、振頓（奮い起こす）の意なり。其の題字を將って振頓すること一番なるを言うなり。復た「一二の語を用いて之を挫き、以て止勢を作る」（『讀書作文譜』卷之七・九葉・「頓挫」条）。挫とは折挫（抑制する）の意なり。其の題字を將って折挫すること一番なるを言うなり。前〔の条〕に言う「抑揚」は、乃ち先ず抑え後に揚ぐるなり。此に言う「頓挫」は、猶お先ず揚げ後に抑えるの意なるがごとし」（『斯文規範』卷之六・二十一葉・「一日頓挫」条）。

轉折：『讀書作文譜』に「文章 説き到り、此の理 已に盡くれば、再び説き難きに似たり。拙筆 此に至り、技 窮まる。〔しかし〕巧みなる人は、一たび轉灣す。便ち又た另に是れ一番の境界なり。以て許多の議論を生出し、理境 窮まり無かる可し。若し更に進まんと欲すれば、未だ嘗て再び轉ず可からずんばあらざるなり。凡そ更に一層を進め、另に一論を起す者は、皆な轉の理なり。折に至れば、則ち微かに同じからず。折は則ち廻環（循環）反復の致す有り。東より西に折れ、或いは又た西より東に折れるなり。其の間の数十句中に四五の折する者有り、三四句の一句ごとに一折する者有り。大都は四五折の後、即ち復た折れる可からず。其の往復離合・抑揚高下の致すは、之を平叙無波なる者に較べれば、自然と意味 同じからざるなり。此れ折の理なり」（『讀書作文譜』卷之七・六葉・「轉折」条）。

また、王允徳の『斯文規範』（康熙五十九年〔一七二〇〕序）と唐彪『讀書作文譜』（康熙三十一年〔一六九二〕刊）とに「邵芝南 曰く、文に品有り、機有り。品は譬えるに則ち聖なり。機は譬えるに則ち巧なり。機は手腕（技巧）の間に（『讀書作文譜』は「中」に作る）存し、意想（想像）の表に行なわる。耆宿にして得る能わず、幼學にして之を得る者有り。終日 構思して成る能わずして倉卒にして立ちどころに就く者有り。機 一たび得れば、則ち諸もろの妙 悉く筆下に来り、虚靈變化 備わらざる所無し。昔人 云う、文 妙に入るの時（『讀書作文譜』は「時」字なし）、熟に過ぎるは無し。熟すれば、則ち氣機 自然と流利するなり。生なれば則ち未だ澁滯せざる者有らざるなり。「機」字の正義は、此の如きに過ぎず。其れ開闔・抑揚・呼吸を以て機と爲す者有るも、眞に（『讀書作文譜』は「眞」を「皆穿鑿」に作る）無稽（でたらめ）の論なり」（『斯文規範』卷之六・五葉・「一曰機」条／『讀書作文譜』卷之七・十九葉・「機」条）。

方苞によれば、明代の八股文は、

- ①洪武・永樂（建文を含む。以下同じ）・洪熙・宣徳・正統・景泰・天順・成化・弘治
- ②正徳・嘉靖
- ③隆慶・萬曆
- ④天啓（泰昌を含む。以下同じ）・崇禎

の四期の分類できると言うのである。

方苞と同時代の王步青（字は罕皆，号は已山。江蘇金壇の人。康熙十一年〔一六七二〕～乾隆十六年〔一七五一〕。雍正元年〔一七二三年〕癸卯恩科三甲八十六名の進士）も、『程墨所見集』において、明代の八股文を、

- ①洪武・永樂・洪熙・宣徳・正統・景泰・天順・成化・弘治：『程墨所見集一』による

②正徳・嘉靖:『程墨所見集二』による

③隆慶・萬曆:『程墨所見集三』による

④天啓・崇禎:『程墨所見集四』による

に分類する。

石韞玉（字は執如・号は琢堂。江蘇呉縣の人。乾隆二十一年〔一七五六〕～道光十七年〔一八三七〕。乾隆五十五年〔一七九〇〕庚戌恩科の狀元）も同じように考える。

經義の作 宋人に肇まり、明 ^{たも}天下を有ち、遂に之を以て士を取る。然れども大輅・椎輪の制① 尚お荒略にして〔成〕化・〔弘〕治に至る。正〔徳〕・嘉〔靖〕、規矩 粗ぼ備わる。隆〔慶〕・萬〔曆〕以降、機巧（『孟子』盡心上の「機變の巧」にもとづく:臨機応変の口先だけのごまかし） 日々生ず。天〔啓〕・崇〔禎〕に迄び、遂に文章の變を極む……（「天崇文英序」『獨學廬四稿』文卷三・十八葉）。

①梁・昭明太子「文選序」の「夫の椎輪（飾りのない粗末な車）は大輅（玉で飾った美しい車）の始め爲るも、大輅に寧^{いずく}んぞ椎輪の質有らんや」に基づき、文章にも変化があるの意味。

石韞玉も次のように四期に分類するのである。

①洪武・永樂・洪熙・宣徳・正統・景泰・天順・成化・弘治

②正徳・嘉靖

③隆慶・萬曆

④天啓・崇禎

侯康（字は君模。廣東番禺の人。嘉慶三年〔一七九八〕～道光十七年〔一八三七〕。道光十四年〔一八三四〕の優貢舉人）も「四書文源流考」で、同じように分類し、それぞれの時期の特徴を次のように述べる。

有明の制義の體 凡そ屢しば變ず。洪〔武〕（一三六八年～一三九八年）・永〔樂〕（一四〇三年～一四二四年）より〔成〕化（一四六五年～一四八七年）・〔弘〕治（一四八八年～一五〇五年）に至る百餘年の中、皆な傳註を

格遵（謹んで遵守する）し、語氣を體會し、理法を以てたつと尚ぶと爲す。正〔德〕（一五〇六年～一五二一年）・嘉〔靖〕（一五二二年～一五六六年）一變し、氣格（氣韻と風格）を尚ぶ。隆〔慶〕（一五六七年～一五七二年）・萬〔歷〕（一五七三年～一六二〇年）再び變じて機法を尚ぶ。〔天〕啓（一六二一年～一六二七年）・〔崇〕禎（一六二八年～一六四四年）三たび變じて才情（文才）を尚ぶ。此れ其の大略なり（侯康「四書文源流考」『學海堂集』卷八・四十五葉）。

侯康も次の四期に分類する。

- ①洪武・永樂・洪熙・宣德・正統・景泰・天順・成化・弘治
- ②正徳・嘉靖
- ③隆慶・萬曆
- ④天啓・崇禎

また、楊懋建の「四書文源流攷」も同じように、

- ①洪武・永樂・洪熙・宣德・正統・景泰・天順・成化・弘治
- ②正徳・嘉靖
- ③隆慶・萬曆
- ④天啓・崇禎

の四期に分類する。そして、方苞の「欽定四書文選 凡例」に基づき、それぞれの優れたところと弊害とを指摘する。

洪〔武〕（一三六八年～一三九八年）・永〔樂〕（一四〇三年～一四二四年）より以て〔成〕化（一四六五年～一四八七年）・〔弘〕治（一四八八年～一五〇五年）に至る百餘年の中、皆な傳注を格遵し、語氣を體會し、墨繩きまりを謹守し、尺寸も踰えず。所謂ゆる「渾渾噩噩」（『法言』問神：純朴）として、「太璞（素材のままの玉） 雕らず」（『法言』寡見に「良玉不彫」），而して簡要（簡潔に要点をつまみ出す）親切（適切）にして精彩有る者もて貴しと爲す。其の傳注の寥寥たる數語を直寫し、對比に及べば字面を改換し、意義は別かつ無き者は、其の蔽なり。

正〔徳〕（一五〇六年～一五二一年）・嘉〔靖〕（一五二二年～一五六六年）の作者に至りて始めて能く古文を以て時文（八股文）と爲し、經史を融液（融かして一体にする）し、題の義蘊（精密で奥深い意味）をして、隱顯（見えかくれさせる）曲鬯（委細に展開する）し、光華 發越（あらわし）し、氣格（氣韻と風格） 深嚴（深く莊嚴に）にせしむ。明文の極盛と爲す。而して氣息（風格） 醇古（古風で質朴）にして、寔に發揮（表現）する有る者もて貴しと爲す。其の規模（形式） 具われりと雖も、寔理の存する無く、儒先の語録を剽襲（焼き直し）し、膚殼（空疎）平衍（平坦で変化に乏しい）なる者は、其の蔽なり。

嘉靖（一五二二年～一五六六年）の末造、冗蔓（煩瑣で乱雑）に流る。熙甫（歸有光） 起きて之を振り、隆〔慶〕（一五六七年～一五七二年）・萬〔曆〕（一五七三年～一六二〇年）は、規方に入りて員（圓）と爲し、兼ねて機法を講ず。務めて靈變（変化が迅速なこと）を爲し、巧密（技巧）の加うる有りと雖も、氣體 茶然（衰微する）たり。故に氣質 端重（きちん

✓（2）『欽定四書文』における四期それぞれの選択の基準は次のようになっている。

〔成〕化（一四六五年～一四八七年）・〔弘〕治（一四八八年～一五〇五年）以前は、其の簡要（簡潔に要点をつまみ出す）親切（適切）にして稍や精彩有る者を選ぶ。其の傳註の寥寥（少し）たる數語を直寫し、對比に及べば字面を改換して、意義の別かつ無き者は、〔選択に〕「與からず」（『論語』泰伯）。

正〔徳〕（一五〇六年～一五二一年）・嘉〔靖〕（一五二二年～一五六六年）は則ち専ら氣息（風格） 醇古（古風で質朴）にして、實に發揮（表現）有る者を取る。其の規模（形式）具われりと雖も、精義の存する無し、及び先儒の語録を剽襲（焼き直し）し、膚殼（空疎）平衍（平坦で変化に乏しい）なる者は、〔選択に〕「與からず」（『論語』泰伯）。

隆〔慶〕（一五六七年～一五七二年）・萬〔曆〕（一五七三年～一六二〇年）は明文の衰と爲す。必ず氣質 端重（きちんとして重々しい）にして、間架 渾成（渾然一体）し、巧みに雅を傷つけざるは、乃ち流弊無し。其の専ら凌駕を事とし、輕剽（輕薄）促隘にして、機趣（情趣）有りとし、之を按じて實理・眞氣無き者は、〔選択に〕「與からず」（『論語』泰伯）。

〔天〕啓（一六二一年～一六二七年）・〔崇〕禎（一六二八年～一六四四年）の名家の傑特（特出）なる者は、其の思力の造す所・塗徑の開く所、或いは前輩の到る能わざる所と爲す。其の餘の雜家は則ち規矩を恠き棄て以て新奇と爲し、經・子を剽剝（剽窃）し以て古奥（古めかしくて奥があり、理解し難い）と爲し、字句を雕琢し以て工雅と爲す。書卷（著述） 富むと雖も・辭氣（言葉） 豐なりと雖も、聖經賢傳の本義 轉じて蔽蝕する所と爲す。故に別して之を去り、卓然たる名家なる者と相い混えしめざるなり（『進四書文選表』『欽定四書文』凡例・一葉）。

として重々しい)にして巧みに雅を傷つけざる者もて貴しと爲す。其の崑^{もつぱ}ら凌駕⁽³⁾を事とし、輕剽(輕薄)促隘にして、機趣(情趣)有りと雖も、之を按ずるに寔理・眞氣無き者は、其の蔽なり。日々軟調に趨き三十年に垂とし、萎敗(枯れる) 已に極まれり。

天[啓](一六二一年～一六二七年)・崇[禎](一六二八年～一六四四年)の諸家 出でて之を掃除(取り除く)し、「思いを窮め精を畢くし」(韓愈「潮州刺史謝上表」)、務めて奇特(特別)と爲し、載籍(典籍)を包絡(包括)し、物情(世情)を雕鏤し、凡そ胸中の蘊^{うん}みて宣べんと欲する所の者は、題に借りて發揮す、故に其の名家の傑特(特出)なる者は、經傳を融[合]して性靈を抒べ、雄奇(雄大でめずらしい)奥衍(深くて広い)鬱勃(充滿)淋漓(満ちる)にして、興す可く觀る可し、光氣(風潮・氣風) 泯没するを得ず。其の至れる者は、「單微を直湊して」(『韓非子』有度：すべてを集める)、幾んど聖賢の神氣・聲歎をして聞くが如からしめ、思力の造る所・塗徑の開く所 寔に多し。前輩 到る能わざる所なり。其の餘の雜家は則ち規矩^{そむ}を備き棄て以て新奇と爲し、經・子を剽剽(剽窃)し以て古奥(古めかしくて奥があり、理解し難い)と爲し、字句を雕琢し以て工雅と爲す。書卷(著述)・辭氣(言葉) 豊富なりと雖も、聖經賢傳の本義 轉じて蔽蝕する所と爲る者、亦復た少なからず……(楊懋建「四書文源流攷」『學海堂集』卷八・十六葉～十七葉)。

こうした分類に対して、『欽定四書文』とほぼ同時期に出た「欽定」の『明史』(乾隆四年(一七三九)刊行)の選舉志⁽⁴⁾は、八股文とのみ限定はできないかもし

(3) 戴名世(字は田有、一字は褐夫、南山先生もしくは憂庵先生と尊称される。安徽桐城の人。順治十年〔一六五三〕～康熙五十二年〔一七一三〕。康熙四十八年〔一七〇九〕己丑科の榜眼)は、「凌駕」と「舖叙」とを對比して、次のように説明する。

今の經義(八股文)を論ずる者に二家有り。「舖叙」と曰い、「凌駕」と曰う。「舖叙」とは、題[目]の位置に循いて、首より尾に及ぶまで、敢て一言の倒置有らず。以爲らく此れ成化(一四六五年～一四八七年)・弘治(一四八八年～一五〇五年)の諸家の法なり。「凌駕」とは、題[目]の要を相て之を提掣(明示)し、參伍(入り混じり)錯綜し、千變萬化するも、其の宗を離れず。以爲らく此れ『史[記]』・『漢[書]』・歐[陽脩]・曾[鞏]の法なり……(「丁丑房書序」『南山集偶鈔』丁丑 一葉)。

れないが、「舉業の文字」について次のように述べ、少し異なる見解を示す。

論者 明の舉業の文字を以て唐人の詩に比ぶるに、國初は初唐に比し、成
 [化] (一四六五年～一四八七年)・弘[治] (一四八八年～一五〇五年)・
 正[徳] (一五〇六年～一五二一年)・嘉[靖] (一五二二年～一五六六年)
 は盛唐に比し、隆[慶] (一五六七年～一五七二年)・萬[曆] (一五七三年
 ～一六二〇年)は中唐に比し、[天] 啓 (一六二一年～一六二七年)・[崇]
 禎 (一六二八年～一六四四年)は晩唐に比すと云う(『明史』卷六十九・志
 第四十五・選舉一)。

『明史』選舉志では、四期に分類するものの、成化・弘治と正徳・嘉靖とをひと
 まとめにするのである。

- ①洪武・永樂・洪熙・宣徳・正統・景泰・天順：初
- ②成化・弘治・正徳・嘉靖：盛
- ③隆慶・萬曆：中
- ④天啓・崇禎：晩

『可儀堂一百二十名家制義』を編纂した俞長城(字は寧世、号は碩園。浙江
 桐郷の人。康熙二十四年〔一六八五〕乙丑科三甲五名の進士)も、明代の八股
 文の変遷を同じように考えている。

文運の升るや、其の體 正よりす。文運の降るや、其の體 偏よりす。天順
 (一四五七年～一四六四年)以前は淳樸にして未だ開かず。成[化] (一四
 六五年～一四八七年)・弘[治] (一四八八年～一五〇五年)・正[徳] (一
 五〇六年～一五二一年)・嘉[靖] (一五二二年～一五六六年)の四朝は、

✓(4) 毛奇齡(字は大可、号は西河。浙江蕭山の人。明・天啓三年〔一六二三〕～清・康熙五十五年〔一七一六〕。康熙十八年〔一六七九〕己未科博學鴻儒の二等十九名)によると、選舉志は陸業(字は義山、原名は世枋、別号は雅坪。浙江平湖の人。明・崇禎三年〔一六三〇〕～清・康熙三十八年〔一六九九〕。康熙六年〔一六六七〕丁未科二甲十四名の進士。康熙十八年〔一六七九〕己未科博學鴻儒の一等十二名)が作成にかかわったと言う。

公(陸業)・・・改めて翰林院編修を授け、明史纂修官に充てられ、「成祖文皇帝紀」及び「漕河」・「水利」・「藝文」・「選舉」の諸志を撰す……(「皇清予告内閣學士兼禮部侍郎雅坪陸公神道碑銘」『西河文集』神道碑銘二)。

疎散（まばら）・浩瀚（きわめて多い）・離奇（突飛）・簡淡（簡素で淡泊）の境 各々同じからざるも、正面に歸せざるは無し。降りて隆〔慶〕（一五六七年～一五七二年）・萬〔曆〕（一五七三年～一六二〇年）は、正なる者 什に七、側なる者 什に三なり。降りて〔天〕啓（一六二一年～一六二七年）・〔崇〕禎（一六二八年～一六四四年）は、正なる者 什に三、側なる者 什に七なり。此れ有明一代の升降なり……（俞長城「題張爾成稿」『可儀堂一百二十名家制義』卷之四十一・六十一葉・「張爾成稿」条）。

俞長城も、成化・弘治と正徳・嘉靖とをひとまとめにする。

①洪武・永樂・洪熙・宣徳・正統・景泰・天順

②成化・弘治・正徳・嘉靖

③隆慶・萬曆

④天啓・崇禎

李光地（字は晉卿，号は厚庵，別に榕村とも号す。福建安溪の人。明・崇禎十五年〔一六四二〕～清・康熙五十七年〔一七一八〕。康熙九年〔一六七〇〕庚戌科二甲二名の進士）は少し異なる見解を示す。

明代の時文は、洪〔武〕（一三六八年～一三九八年）・永〔樂〕（一四〇三年～一四二四年）・宣〔徳〕（一四二六年～一四三五年）・景〔泰〕（一四五〇年～一四五七年）・天〔順〕（一四五七年～一四六四年）を初と爲し、成〔化〕（一四六五年～一四八七年）・弘〔治〕（一四八八年～一五〇五年）を盛と爲し、正〔徳〕（一五〇六年～一五二一年）・嘉〔靖〕（一五二二年～一五六六年）を中と爲し、〔隆〕慶（一五六七年～一五七二年）・〔萬〕曆（一五七三年～一六二〇年）を晩と爲す。天啓（一六二一年～一六二七年）以後は、録するに足らず（『榕村語録』卷二十九・詩文一）。

李光地は、とりあえずは四期に分けるものの、成化・弘治を独立させ五つの時期に区切ったうえで、天啓以後は評価しないという。

①洪武・永樂・〔洪熙〕・宣徳・〔正統〕・景泰・天順：初

②成化・弘治：盛

③正徳・嘉靖：中

④隆慶・萬曆：晩

⑤天啓・崇禎：録するに足らず

以上、清朝の人たちの分類は、李光地を除けば、成化・弘治を景泰・天順の後に続けてひとまとめとするのか、成化・弘治の前においてひとまとめにするのかが異なるものの、明代八股文を四期に分けて考えていた。これは、唐詩を初唐・盛唐・中唐・晩唐の四期に分類するのに倣ったものであろう。

こうした分類に対して、紀昀（字は曉嵐、一字は春帆、晩年に石雲と号す。河北獻縣の人。雍正二年〔一七二四〕～嘉慶十年〔一八〇五〕。乾隆十九年〔一七五四〕甲戌科二甲四名の進士）は、明代の八股文の変遷の特徴を次のように述べる。

明 元の制に沿ひ、小しく變通を爲す。吳伯宗（名は祐、字が伯宗。字で通行する。江西金谿の人。？～洪武十七年〔一三八四〕。洪武四年〔一三七一〕辛亥科の狀元）の『榮進集』中に尚お其の洪武辛亥（洪武四年〔一三七一〕）の會試卷を全載す。大抵皆な義理を闡明し、未だ嘗て才を矜り博きを炫かすを以て相ひ高しとせず。成化（一四六五年～一四八七年）の後、體裁（文章の形式）漸く密に、機法 漸く増す。然れども北地（李夢陽）文體を變じ、姚江（王守仁）學派を變ずるも、皆な敢えて其の説を以て經義（八股文）に入れず。蓋し尺度 ^{きまり} 是の若く之れ謹嚴なり。其の佛書を以て經義（八股文）に入るは、萬曆丁丑（萬曆五年〔一五七七〕）の會試より始まる。六朝の詞藻を以て經義（八股文）に入るは、幾社より始まる。是に於いて新異日出し、明末に至り變態（変化）極まれり……（「甲辰會試錄序」『紀文達公遺集』卷八・一葉～二葉）。

明の初期は、義理を説き明かすだけで、能力や学識を誇ったりはしなかった。成化（一四六五年～一四八七年）より後に形式が整う。李夢陽や王守仁のようなものも出たが、八股文の内容には影響をあたえなかった。仏教的なものが、入り込むのは萬曆五年〔一五七七〕の會試からである。六朝の言葉を持ち込むのは、

幾社から始まり、明末に変化の最高潮をむかえる。つまり、明初において經書の言葉通りに解釈して作成された八股文が、成化の後に形式的な完成をみて、萬曆五年〔一五七七〕以後からいろいろな要素を取り入れて変化していったというのである。すると紀昀は、明代の八股文をおおまかに、三つに区分することを想定していたといえるのではないだろうか。

梁章鉅（字は閔中、又の字を菑林。号は菑鄰、晩年に退庵と号す。福建長樂の人。乾隆四十年〔一七七五〕～道光二十九年〔一八四九〕。嘉慶七年壬戌科〔一八〇二〕二甲九名の進士）は、『制義叢話』で、

制義は、宋に始まり明に盛んなり。洪〔武〕・永〔樂〕より以て天〔啓〕・崇〔禎〕に逮ぶ三百年の中、體 凡そ屢しば變ず。〔それは〕亦た猶お唐詩の初・盛・中・晩に分つがごときなり。〔しかし〕今、見聞する所・話の傳う可き有る者に就き、輯めて明初の作者もて〔『制義叢話』の〕第四卷と爲し、明の中葉もて〔『制義叢話』の〕第五卷と爲し、明季もて〔『制義叢話』の〕第六卷と爲す（『制義叢話例言』『制義叢話』『制義叢話例言』条・一葉～二葉）。

と述べて、作者ごとに明初・明中葉・明季に分類する。

私も、明代の八股文を大きく作者によって初期・中期・後期に分類して理解するのが穩当ではないかと考える。そこで、拙稿では八股文の完成者として名高い王鏊⁽⁵⁾（字は濟之、又の字は守溪、諡は文恪。江蘇吳縣の人。景泰元年〔一四五〇〕～嘉靖三年〔一五二四〕。成化十年〔一四七四〕の解元、成化十一年〔一四七五〕乙未科の會元・探花）前後までの作者を初期に属するものとして考察を行いたい。また、それぞれの八股文作者の年代的な振り分けは、進士になった時期によることにする。

なお、盧前（字は冀野、号は小疏、別に飲虹と号す。江蘇南京の人。一九〇五年～一九五一年）は、『八股文小史』（商務印書館・民國二十六年〔一九三七〕刊）において、明代八股文を正徳・嘉靖以前と隆慶・萬曆以後の二期に分類する。

(一) 明初の八股文とその特徴

顧炎武（字は寧人、初名は絳、後に炎武に改める。亭林先生と称される。江蘇崑山の人。明・萬曆四十一年〔一六一三〕～清・康熙二十一年〔一六八二〕）は、次のように言う。

經義の文、流俗之を八股と謂う。蓋し成化（一四六五年～一四八七年）以後に始まる。股とは、對偶の名なり。天順（一四五七年～一四六四年）以前は、經義の文 傳注を敷衍するに過ぎず。或いは對〔句〕にし、或いは散〔文〕にし、初めは定式無し⁽⁶⁾。其の單句題も亦た甚だ少なし。成化二十三年（一四八七）の會試の「樂天者保天下」（『孟子』梁惠王下）文の起講は先ず三句を提し、即ち「樂天」を講ず。四股の中間の過接の四句に復た「保天下」を講ず。四股 復た四句を収めて、再び大結を作る。弘治九年（一四九六）の會試の「責難於君謂之恭」（『孟子』離婁上）文の起講に先ず三句を提し、即ち「責難於君」を講ず。四股の中間の過接の二句に復た「謂之恭」を講ず。四股 復た二句を収めて再び大結を作る……（『日知錄』卷之十六・十七葉・「詩文格式」条）。

これに対して侯康は、八股の法の形成を次のように考える。

八股の法は『明史』（卷七十・志第四十六・選舉二）に亦た「太祖と劉基に

↙ (5) 俞長城は『可儀堂一百二十名家制義』で王鏊を次のように評価する。

制義の守溪（王鏊）有るは、猶お史の龍門（司馬遷）有り・詩の少陵（杜甫）有り・書法の右軍（王羲之）有るがごとし。百世を更めて並ぶ者莫し。此れより前、風會（風潮）未だ開かれず。〔しかし〕守溪（王鏊）の有らざる所無し。此れより後、時流 屢しば變づ。〔しかし〕守溪（王鏊）の包〔括〕せざる所無し。理 守溪（王鏊）に至りて實あり。氣 守溪（王鏊）に至りて舒ぶ。神 守溪（王鏊）に至りて完〔成〕す。法 守溪（王鏊）に至りて備われり。蓋し千子（艾南英）・大力（章世純）・維斗（楊廷樞）・吉士（錢禔）奉じて尸祝（祭祀）を爲さざるは莫し。或いは其の彫鏤（文章の彫琢）を惡みて、其の圓熟（熟達する）を疵とするは、則ち亦た過高の論なり。運 天地の和に値り、居 山川の秀を得、盛明を夾輔（補佐）し、「大有」（『易』大有）にして溺れず。疑貳（嫉妬から異心を生じる）に遭逢し、「明夷」（『易』明夷）にして傷つかず。理學に於いて賢と爲り、文章に於いて聖と爲り、六經に於いて臣と爲り、諸家に於いて祖と爲る。豈に一代の俊英、斯文の宗主に非ざらんや（俞長城「題王守溪稿」『可儀堂一百二十名家制義』卷之四・十六葉～十七葉・「王守溪稿」条）。

定めらる」と謂う。『日知録』（卷十六・「詩文格式」条）は則ち「天順（一四五七年～一四六四年）以前，〔經義〕の文，〔傳注を敷衍するに過ぎず〕。或いは對〔句〕に或いは散〔文〕にし，初めは定式無^く，八股の「始まるは成化（一四六五年～一四八七年）以後よりす」と謂う。因りて成化二十三年（一四八七）の會試の「樂天者保天下」（『孟子』梁惠王下）文と宏（弘）治九年（一四九六）の會試の「責難^{ママ}于君謂之恭」（『孟子』離婁上）文を擧げて証と爲す。然れども成化の前に已に八股を用いる者有り。于忠肅（于謙）の「不待三，然則子之失伍也亦多矣」（『孟子』公孫丑下）文・王宗貫（王恕）の「知者樂水」（『論語』雍也）一節，及び「鄉人皆好之」（『論語』子路）一節文の類，皆な八股の格なり（侯康「四書文源流考」『學海堂集』卷八・四十四葉）。

顧炎武は，八股の對句の格式が定まったのは，成化（一四六五年～一四八七年）以後だとする。しかし，于謙（字は廷益，号は節菴，諡は肅愍，萬曆中に忠肅に改められる。浙江錢塘の人。一三九八年?～一四五七年?。永樂十九年〔一四二一〕辛丑科三甲九十二名の進士）や王恕（字は宗貫。陝西三原の人。永樂十四年〔一四一六〕～正徳三年〔一五〇八〕。正統十三年〔一四四八〕戊辰科三甲三十名の進士）の成化以前の制義もすでに八股文の格式を備えていると，侯康はいうのである。

このように，對句の形式をそなえたいわゆる八股文の成立時期については異論がありはっきりしない。ただ，清朝公認の『欽定四書文』に収められた成化

✓(6) 戴名世は，康熙三十六年に「武曹（汪份：字は武曹。江蘇長洲の人。順治十二年〔一六五五〕～康熙六十年〔一七二一〕。康熙三十八年〔一六九九〕の舉人。康熙四十二年〔一七〇三〕癸未科二甲十四名の進士）に語れて曰く」として，ほとんど同じ発言を行っている。

經義の文 天順（一四五七年～一四六四年）より以前，作者 第だ傳註を敷衍し，或いは整に或いは散に，初めは定式無し。而して成化（一四六五年～一四八七年）以後，始めて八股の號有り……（「丁丑房書序」『南山集偶鈔』丁丑 一葉）。

顧炎武の発言は，康熙九年（一六七〇）符山堂初刻八卷本『日知録』には見えず，康熙三十四年（一六九五）潘氏遂初堂刻三十二卷本『日知録』（卷之十六・十七葉・「詩文格式」条）に見える。また，戴名世の序文は，丁丑（康熙三十六年〔一六九五〕）に書かれているようなので，戴名世は刻されて二年目の『日知録』を参照した可能性も考えられるのではないだろうか。

以前の八股文は、本来の形のままであるかは疑問が残るのであるが⁽⁷⁾、八股文の形式を備えている。

これは、洪武年間の八股文があまり伝わっていないことにも原因があるかもしれない。俞長城は、次のように言う。

明の洪武乙丑〔十八年〔一三八五年〕〕より建文の末（一四〇二年）に逮ぶまで、其の間の劉〔基〕・方〔孝儒〕・黃〔子澄〕・解〔縉〕諸君子 皆な傳文有り、然れども率ね多くみ観ず。獨り風氣の樸なるのみに非ず、亦た靖難の兵 起るに由り、散失する者多ければなり……（俞長城「題于廷益稿」『可儀堂一百二十名家制義』卷之二・五十葉～五十一葉・「于廷益稿」条）。

洪武十八年（一三八五年）から建文四年（一四〇二）までの間の伝えられている八股文には、劉基・方孝儒・黃子澄・解縉などのものがあるが、靖難の変のため、多くは伝わっていないと言うのである。

そのなかで、明代最初の典型的な八股文は、どれになるのかについて、梁章鉅は『制義叢話』において、祖父の梁劍華（字は執瑩、又の字は天池。乾隆年間〔一七三六年～一七九五年〕の諸生）の『書香堂筆記』を引用し、それに次のような按語をつけて判断する。

『書香堂筆記』に云う、「前明の制義を録する者は、自ずから洪武〔十八年〔一三八五年〕〕乙丑科の〔江西〕分宜の黃子澄の元墨を以て第一篇の文字と爲す。解大紳（解縉：名は縉，字は大紳。江西吉水の人。洪武二年〔一三六九〕～永樂十三年〔一四一五〕。洪武二十一年〔一三八八〕戊辰科三甲十名の進士）學士 批して、莊重典雅，[明初の高級官僚の間に流行した]

(7) 成化以前の八股文だけでなく、すべての八股文の名篇について、方苞は次のように言う。

前人の流傳する名篇は、これまで間 字句率易（平板で簡単）にして、義理 或いは未だ妥（穩当）ならざる者有り。向來、各家の選本、多く節刪し互いに異なるの處有り。今、其の適當なる者を選び、之に従う。其の未だ諸選の摘發を経ずして、稍や改易を加うる者は、亦た間 之れ有り。全文 俱に佳きも、語句 偶訛し、改易を爲し難き者に至れば、必ず細かに摘出す。亦た悞りを後學に貽るを恐ればなり（「進四書文選表」『欽定四書文選』凡例・四葉）。

実際のところ、八股文はまともに取り扱うものではないという意識があったためか、同じ八股文であっても選集ごとに文字や対句の部分の異同が少なからず存在する。

臺閣〔體〕の文字なり、と云う。徐存菴（徐越：名は越、字は山琢、号は存菴。江蘇山陽の人。明・泰昌元年〔一六二〇〕?～清・康熙二十六年〔一六八七〕。清・順治九年〔一六五二〕壬辰科三甲一名の進士）曰く「時 未だ闡牘（受験用の文章）の科條（法令）あらず、行文（文章） 尚お頌體に涉り、收縦の機・浩蕩（広大）の氣もて已に羣英を辟易（退ける）す。況や此れ文章の始めと爲せば、自ずから應に首録し、以て制義の河源を存すべし」と。……〔梁章鉅が〕按ずるに、各選本 多くは劉文成公基の「敬事而信」題文を以て有明一代の制義の祖と爲す。然れども是れ初體の尤なる者なり……究に未だ精なる^{もの}的ならず。故に彼（劉基の八股文）を舍てて此れ（黃子澄の八股文）を録す（『制義叢話』卷之四・一葉）。

各種の明代八股文の選集では、劉基（字は伯温。浙江青田の人。元・至大四年〔一三一〕～明・洪武八年〔一三七五〕。元・元統元年〔一三三三〕の進士）の「敬事而信」題文を最初ものとしているが、『書香堂筆記』で言うように、黃子澄（名は湜、字が子澄。字で通行する。諡は肅愍、萬歴中に忠肅に改められる。江西分宜の人。洪武十八年乙丑科〔一三八五〕の探花）の洪武〔十八年〔一三八五年〕〕乙丑科會試の答案を最初のもので考えたいと言うのである。

ただ、『欽定四書文』には、洪武・建文年間の八股文は収められていない。清朝乾隆期に『欽定四書文』の編纂を行なった方苞たちには、劉基や黃子澄の八股文は、「永しえに法程と爲す」（「欽定四書文選奏摺」『欽定四書文選』・「奏摺」条・二葉）ものとしては映らなかつたためであろう。そこで、拙稿においても、方苞たちの観点にしたがい、永樂期の八股文から検討を行ないたい。

では、その初期のころの八股文の特徴とはどのようなものであったのだろうか。顧炎武は、

天順（一四五七年～一四六四年）以前は、經義の文（八股文） 傳注を敷衍するに過ぎず（『日知錄』卷十六・「詩文格式」条）。

と述べる。

すでに見たように、楊懋建は、「四書文源流攷」で洪武・永樂・洪熙・宣德・

正統・景泰・天順・成化・弘治の八股文を次のように評価する。

洪〔武〕（一三六八年～一三九八年）・永〔樂〕（一四〇三年～一四二四年）より以て〔成〕化（一四六五年～一四八七年）・〔弘〕治（一四八八年～一五〇五年）に至る百餘年の中、皆な傳注を恪遵し、語氣を體會し、繩墨^{きまり}を謹守し、尺寸も踰えず。所謂ゆる「渾渾噩噩」（『法言』問神：純朴）として、「太璞（素材のままの玉） 雕らず」（『法言』寡見に「良玉不雕」），而して簡要（簡潔に要点をつまみ出す）親切（適切）にして精彩有る者もて貴しと爲す。其の傳注の寥寥たる數語を直寫し、對比に及べば字面を改換し、意義は分かつ無き者は、其の蔽なり……（楊懋建「四書文源流攷」『學海堂集』卷八・十六葉～十七葉）。

弘治以前の八股文は、傳註を遵守して、踏み外さず、純朴であり、またそうしたものが評価されたという。

侯康は、天順までの作品は簡古（素朴）で渾噩（純朴）であると言う。

明初の文 簡古（素朴）なり……劉（劉基）・方（方孝儒）・黃（黃子澄）・解（解縉）及び于謙・薛瑄（字は德温，号は敬軒，諡は文清。山西河津の人。洪武二十二年〔一三八九〕～天順八年〔一四六四〕。永樂十九年〔一四二一〕辛丑科二甲十四名の進士）・陳獻章（字は公甫，号は石齋，晩年には紫水歸人と号す，諡は文恭。廣東新會白沙里の人。宣德三年〔一四二八〕～弘治十三年〔一五〇〇〕。正統十二年〔一四四七年〕の舉人）・商輅（字は弘載，号は素菴。浙江淳安の人。明・永樂十二年〔一四一四〕～明・成化二十二年〔一四八六〕。正統十年〔一四四五〕乙丑科の狀元）・岳正（字は季方，号は蒙泉，諡は文肅。順天府潮縣の人。永樂十六年〔一四一八〕～成化八年〔一四七二〕。正統十三年〔一四四八〕戊辰科一甲三名（探花）の進士）・王恕（字は宗貫，諡は端毅。陝西三原の人。明・永樂十四年〔一四一六〕～明・正徳三年〔一五〇八〕。正統十三年〔一四四八〕戊辰科三甲三十名の進士）・李東陽（字は賓之，号は西涯，諡は文正。湖廣茶陵の人。正統十二年〔一四四七〕～正徳十一年〔一五一六〕。天順八年〔一四六四〕甲申科の

二甲一名の進士)の輩に至りて、則ち猶然(依然)として渾噩(純朴)たり。然れども此の後より文體 已に漸く險怪(意表をつく)なり(侯康「四書文源流考」『學海堂集』卷八・四十五葉)。

このように、明初の八股文については、明末清初の顧炎武は、明・天順(一四五七年～一四六四年)以前の八股文が「傳注を敷衍するに過ぎ」ないものであるといい、清朝後期の楊懋建や侯康は、さらに素朴で純朴なものと理解していたようである。

そこで、引き続いて八股文の經書解釈の側面を中心にして、清朝の人たちの観点から、明初の個々の作者の八股文の検討を行いたい。そして、ほんとうに「傳注を敷衍するに過ぎ」ないものであったのかを考えてみたい。

(つづく)